# 書類從

百七十九

利書門
類 和
九五九五 號
二〇四四 函
六七〇 冊
架

内閣文庫
和書
九五九五
六七〇
二四一六
號 冊 函 類

内閣文庫

| | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 9595 |
| 冊數 | 670 | (239) |
| 函號 | 214 | 39 |

© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
COLORCHECKER x-rite MSCCPPEC0411
MSCCPPEC0411 x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

# 和歌部世四

## 句題和歌

臣千里謹言去二月十日奉敕朝臣傳勅曰古今和
歌少歌上奉以後撰神代女郎史御製以至今
臣儒門餘業側聽言詞本習能事不辱為今臣雖
使古詞樹成新樹新名加自詠十首歌百卷百樹
豈敢謹以奉進豈敢駿目只恐聞聽千里誠惶誠懼
謹言

内閣文庫

検校係印一集

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第百七十九

和歌部世四　　撿校保已一集

句題和歌

臣千里謹言太二月十日叅議朝臣傳勅曰古今和
謌多少獻上奉命以後鬼神不安卧重痾延以至今
臣儒門餘孽側聽言詩未習艶辞不知所為今臣絶
搜古句構成新謌別糸加自詠十首惣百廿首悚恐
震攝謹以擧進豈求駭目只欲解頤千里誠恐懼誠
謹言

宮内廳書陵部圖書寮

寛平六年四月廿五日

散位従五位上大江朝臣千里

春

咽霧山鶯啼尚少
山る今朝りうる霧にむすまとくや鶯はなきますまとてある
鶯の誘引来花下
鶯乃啼ける声にさそはれて花乃もとにて我はきぬる
偷閑何處無尋春
たちつかる時を忘れていつかすの心はあるうちとともに忘れ
花枝攀度芳絃
心はえるおりる口にちりとぬふ白しのあるうちとおもひ
不是洛陽春

神さぶてゆうぬる里に住人ハ初よ旬ハ花をさに見ん

晩帰多是看花回

いまハくやかへりき物ゆ道ゆ花を人ゆに祖を屋ゆ

緑柳除弱不勝多

たつさぶて緑のいとのよハけ事ハ多とつるちるたよ物

尋花不問春 深淺

花をのみ尋ゆまにまに春ハ山ゆ浅さも深さも見ん

夜風吹送每年春

くゆ物て空ゆ風の吹をへて去吹送るたくそあ年春

春暖山花處〻開

あくゆけ式去山辺の花のみて心もやうと咲みてゆ

落面開義不見人

物と絶て去ゆけ去山よ咲花のちるとそゆ見ん人も

老眼花前暗

さしゆく老ぬる花のかゆ式ハ咲る花さ人をゆ見ん

花下忘帰因義景

花を見て帰ゆ人ん去のゆ式ハ義景花よりて義ゆ

兼時春物少

年月ハ過ぎゆ去物と思ゆ去ゆ去ゆ去ゆ去ゆ去ゆ

送春那得不慇懃

ありてはかなき行くをいそがはさくるを道てをまさるとも
春光只是有明朝
明てとるもわの惜かり去ハさくあ立もし朝て限ある人さ
西處春光同日盡
去城のこゝろ〻もとめとも物ハ同時をぬるゝ
春翁酒易悲
さりにあひて色ゆ多ものをひに泪のあるまん
あくまてとる我身はさをもはるかに思ふ去をとらさあ思ハ
悒悵春帰不留得
欲つくるとり去をはるかにあるあるとりもあるとり

一歳唯殘寸日春
年〻せに又ゆくとしもかりものをそをる中にはるハのこる
夏
春條長定夏陰盛
去のめくるさうくもあるさ思ハ出ゆうとをあまるゆ
景多色春語
うくひすハすくにはるを惜とつゆるゆ色多さ物ををける
蟬不待秋鳴
うちをみのみをくるゆるものあるハ秋をまさをを鳴ぬへる
景語漸稀

昔ハとこさかりなりしかとも今ハ手もとにかりぬへくなる

絲花葉裏稀

ちるまゝにこゝろハ空のくもにかくさるゝ稀ハ匂へるうちとも見さ

春垂帰雁迴

ひさかたのあまのとやまにたちこめてかすみにまとふ雁のこゑ

連岡水上紅

秋かゝてくちすゑのこるあのうへハ紅葉のさゝ色ふをあらそふ

枝底義稀

吹風ハ枝もむすかぬくもりの四方ハ雲ハ雨ハ雪

鳥思殘花枝

なゝ[illegible]の[illegible]ゆゝしきさかりなるハのこりて花のえだをウラやる

月照平砂夏夜霜

月新よかへてまさかりてゆめまハ夏ハよかりあのさかりのしるなる

但能心靜即才涼

我心をつけさ時ハゆゝ風乃みにハあるとすゝうとなり

澗澗路甚清涼

山ゝのみ谷我ウ立つゆゝ水ハゆゝさる風をすゝうなる

秋

天漢迢〻不可期

あまのかはのかとのなるこにあるゆゝ[illegible]ハあひたん事ハさかりあさなる

秋霜鬢似年高長
秋のよはたちにしたがへて我うへにはをるかたしりつる也
秋来只識此身衰
おのづから秋ふるかたに我身はかなくものとおもひしる也
霜草多枯虫思急
をくしもの草は多かれ虫は時をしりて鳴しの秋をうらさこゆる
今霄織女渡天河
ひこぼしせにをくしもの社をりはたあまのかはをわたるらんとふなれ
心情逢秋一似庚
ものおもふこころのあきにあひぬる也はすべて人社みしやうなる也

秋悲不到老人心
おのづから秋をうれしとおもふあまの人はかなしかるへき
樹葉霜紅日
はのもみちしも秋の木はにをくしもの紅ふかくなんあるをみる
蕭條秋思苦
かなしきものは秋のこころ人のうへにはかなしかりける
悲秋々多老
すさまじく秋のものくるしくなんとしをとるをかなしく
紅樹蟬鳴
もみちつくるくれなゐの色にみあるを日は鳴をきくやなるへし

秋のよ我をとゝめつるものハ我宿に社あきまちさゝ
ゆ吹ゝ秋をとゝさに猶しもおくまて鳴ぬん
吹風のたゝくさへさゆるまハ色をあさへもさもおもふる
たのゝくみかゝくまてあるに色とて色のさにも極まさるる
秋のよ我さひみあさつゆ屋の色をたのさてけゝるん
たのめに秋をく色の我をけまハ紅もたのあるる

島栖紅葉樹

秋をさいちゝとあんらのをなく色はまつもたちの枝より鳴

秋屋過面書刻

一

秋のよ我をゝ月あさつゆまハ色をとつあハ色のよあり

寒雁花

行雁花をとゝあくゝ秋ハかゝのとおりひ風さ

寒雁砂静客秋心

鳴屋の砂なよ絶てさゝゝハ旅る人をもひまさりぬ

あく蛬の声ゝなくさゝゆハ秋をも虫の秋をゝ

冬

逐冬先百好風

いはゝと冬をもうるあさまつゝ風の吹をうまさ

中霄似春風

小夜更て狂ふ〳〵まつとまた風の吹くるこゑ毎夜なるに

一年冬至夜偏長

ゆく〳〵とにはたづみのさとは今てそるゆゑとさとは人のこゑに

新愁多待秋長未

あつ〳〵しさこゝろ迷ハれるつゝ恋なの長さ秋くゝめ来る

心灰不改炉中火

松をあつ心ハ火ひとくゝまとあつ〳〵そこにハそよ〳〵

賢雪多於仰下霜

我袋のゝ船白雪と知ゆゑハとこゝろ雪ハこゝろ

年〳〵只見人空老

とかくくゝまにくゝの船てて人ハ老ぬるあるとあるけ

十分一盛巡暖於火

あ〳〵まてにみてる酒こそ春こゝよハ人の身まてにあ〳〵まつ

老眠早覺常殘夜

老ぬる日ハくゝや覺てとゝ多人よくにくゝ覺るそのこゝを

霜未殺蕭〳〵草

よ〳〵まつ〳〵豆和の春〳〵ハ草葉枯さにてかくさゝ

独みそゝある屋にむの人くゝやうくゝそくゝあくゝみくゝ

去年老不惜光陰

かく計老ぬと思へば今更よ春のもるさくもあらしん

風月

風翻白浪花千斤

たさへもの吹くらん風ハさくら波のおとのそそ又ゑやうの通

月照波心一顆珠

照月ハ波のさくらに色のさそなてゝ花ちるさにも又ゑ波る花

紫扉日暮隨風掩

やうやくとむやとにもかりとなれとも吹風のそそ花さそ知る

不明不暗朧々月

照もをくらるもそなの春ハの朧月花そめそ見る

鶯花山月曙

かゝるさの鶯花さそて明ゆ春ハやまかゝる月さそ見る

清景難逢

雲くもてよさ月新ゝ光るさ山ちんさそ入ハ社せめ

非暖非寒湯々風

あつかもて寒もあらしさ極よ吹くる風ハやさ秋もあらん

殘月照山明

ゆくらもくくそぬを月の心とにてゝ波ゝあさ紅

風索屬閑人

さくめく吹くる風ハ吹くさて春ゝ花さに人ハ寄ん

月宮有誠之思人
とる月は新くうとはあるとこゝと等てゆん程てもまゝ
可憐春風老
れみてもとめまはるとまゝ風の吹色うゝ来ぬと思ハ
遊覽
山雲初晴水色新
雲も新く谷ハ山さくさくまゝハ孔雀ていあゝ来
牡愛雲容多生山
白雲の中をかつくゝまゝの矣てそこゝとハ山すて色る
借問春山何處高

やゝひゝてゝ雲の時めくゝとひゆのむいつまゝの時ゝ山ハさゝ
水落春山出白雲
ゆくゝ水ハまゝさゝ山ゝ落ゝまゝハ白雲ゝてそゝ人ますひ
遥見人家花使入
ゝてゝも花と春とゝるゝとにゝゝぬ山すて我ハさてけ
可憐悲靜地
さゝゝゝゝてゝゝゝ春とゝるゝハ晴て志川ゝさ亦ゝ
井下水以之秋日
新ゝけゝさ水ゝあゝゝハ空ゝを人てすゝゝぬまゝ
欲偷風雲繫遊春

吹風の光を学んと思へども
長歳孤獨遊人
あやなくも年の経ぬるかな
天高暮山遠
天津空ちらくはなつるハ雲りやまれ蘇ぬるかり
野曠白雲浮
かさりとて聖人のくるるにつけ迷ハ立ぬ雲ぬ
山花織錦無緣
山とて花の錦をとまつとなんのるとろのやまとさ
[illegible]

谷ちのたとの吉絶と聞ぬ迷ハとさけまとてに
雜
淚流雙袖面成文
ふく波ちる袖よりてハ
別無遠近皆雖見
つるともひつる時ハくるけさをちるさをみるて
別後相思爰遠
別に恋を思ひて
[illegible]
有結古卿意
あさたとにむすぶまつと
[illegible]

別後愛情容義改
わかれにて君をしたひ侍るに
白雲一片隨君去
ちりぬるかたにちりつもるとは君もよそゆきかくまめれ
後時相見是何時
別の後も君をいつまの時とハ思へる
送故辞春両様多
人を送るとも春にさそはれつゝ
万里経年別
逝くゝ人くるはさ程の年をへて独ゐる人ハくるしの

不知何日又相逢
別の後ハたゝぬをつゝ
泣吟雑別情
我とこゝろ
述懐
自静其心延寿命
実をさ心知るとかゝはるとて命をのゝるゝ
心更老於身
世の中をおもひ知る心とそ身よりハ先て老まさる

心をあらはすさ本にあつまれハあるに心まさまも
何獨朝く暮く閑
くの形くていつも我身は独して朝夕にたつたる物あさ
浮生經於夏
まつ人あく方にうつる心をもめるるもたの形うる
憂喜皆心所
う形ともうまつさことも多るを忘れつをあらはける
自遠浮雲云名着
我身をはうつる雲にあるもまとそゆくさあるさう形る
幻世去来夏



まはらうはたくと知る心まハさう形さ夏と思ふ朱浮
浮世水上漚
ひとそめよ志くうつるあ海あはは水の泡とたとえ是て
黒髪俄変春花
志るみの志るく俄よ春あるまハ雲の形とそみくやうる
恩光春景去
我変もよ雲の光にひとくハさ見る身とも志ぬへるり
夏中歓ふ又緩愁
夏にても嬉しさことをとるる時ハ志にちとる身にハ涙也
詠懐

志とや年て為るなる居も春にあひてハ花の人の身

春毎にあひてもあかぬ我身なる花の色の降まさりつゝ

春のみや花ハ咲らむ谷かくれ川辺の草ハ光なきものを

志ら浪の立入へき家にもきみ我身をもおもハさりしハ浮世の中

あし田鶴のむれをはなれて鳴聲ハ雲のうへまでかよふなり

天雲や身をかくしても日の光我身てらせとたのむよしもなき

年毎に春秋の色かはりつゝ我ハむかしにあふよしもなし

思ふこと啼鶯よ聞ハ猶色かハらぬ我むかしをしたふ

みやこ邊に浪立くるまなかをしはしにあはれと身の老つゝ　述懐

年へても我こゝろの社おもはれて春をすくさぬ身にこそありけれ



わかくさはいさきよきするになにこそにたえなくもすくなる春をすくさしとや

右百廿首大江千里之和哥也自寛平六年二月十日至同四月廿五日之詠看日數終間詠也彼人一世之詠哥雖可有數首依隔時代今見稀也此後哥者吾隨所見書加之今世雖有不好之詞等古風體儒門之詠哥何可捨乎不斷勵可被見之誠温故而知新之謂宜哉

文保二年六月四日　參議藤判

寛平御時きさいのみやのうた合の哥　春

當れなきかの河なかなかなることなどいふこゝろを

夏

いとゝたかき雲のうへの月見ればすゑのつゆにもやどれる

秋

うへとこそ紅葉のうつるとにあるとき時雨のあめの降

冬

先日雪のうへにふれる義社冬のうれといひつゝうれ

恋

かの小野の人のこゝろひとつをわくるこゝろ者こゝろ

やうにもせてとゝれるものをこゝろに者たゝ恋

ちはやぶるこゝろといへるこゝろ

乃ちはやぶるこの世をとゝれる者ふるなる人をこゝろ

題不知

秋の野のくさのうへにもあるものを袖とこゝろのあさ

やはひとしてはなにしたがひてのみけるく

はなのうへにあれはこゝろ人のすゝめつゝ

おもふこゝろにはなるゝ者こゝろ命をうら

寛平の御時のうたにてはつるくに者

月けり

ゆくへの猫をたれかとゝ者ゝこゝろ人

題ふ知

あきかせのおとに我こハ人にしらぬ物おもふまけ
清西をき袂かはすものなくこゑの秋風のおとに紀にけん
世中はかなくにかるハぬるとも今かれハあくかるこそあはれ
身にこそかゝる事とは思ふとも人の中待られハ

たまかつをのまもゐのよはぬるとおもひにかきつめけるまもなくはなれよかし
川こゑのかしかとも人のみにつきてしはらく 能居

すへきこしにの思ひとゝろ式部大輔乃すゝみにまゐらせ
にかとそかし嬉しれおもくに
みやこはらく波の立ちとも紀のかくにきこえくる事なしみのしらん

二八し 子古朝臣

志川むしろハかくる袖に波のかけてうしろやすくいふそなたん
義我船臣のかくるにて山月照といへる事を
いつくにかゐの月乃かくろへとそかくるれとも名をやかるらん
松樹不変色
たちかへるあくる紫めつる松もつゐのまつ松ハ松もめてたく
式部大輔乃庭のかれとてもかく風のまてまて来乃
ものにたらちねてさけおもふらへくそ待ける
宜しかのまつかへくはふらるゝかれのまかるのあるぬへき
難波かたとゆかしくをこ待つる

なふたにやれさつすとらん猿ゐるとへそ長とハさて
れ初ふねゝ春くゝ西ゆゆ猿ゐる人へ猿ゐるれ春
ものへゆゆ猿ゐにたれ例ゐるめとさて猿ゐる
れの月やゆのたらかくれ初ゆふれゆみんゆゆゆ猿
落暮鳥鶯花
空猿ゐるゆ夕のゆもゆゆゆ猿ゐ空猿ゐ猿ゐ空猿ゐ
伊勢乃住に猿ゐるゆ猿ゐる
うこやゆれゆゆゆなにゆれゆにゆれゆゆゆゆゆ
同した
けゆゆゆれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ
れゆゆゆゆゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
ゆにゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
れゆゆれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆ
れゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆれゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

いへもとゝ
もとしるくかのこゝろをふかへ橋ゝとあることにめをまつるこゝ
伊勢の伊ふ伊ゝ
あつまゝふ歌人くつかうけうこと
いまはゝそゝ望こゝのさゝるみ扇のゝ色へるもけあん
あつまふ人よあふをやゝとく
あつまゝにへくゝゝもしゝあ言たゝれとふひゝゝ
いゝゝ
すゝのゝ乃ゝ屋のゝゝ色ゝゝ紅ゝ美ゝ世ゝん数まゝ
右大江千里自題和歌以二本校合

三月三日紀呼近曲水宴序　序不書

花落春水　彩恒

色みゝく迷岩ゝを和ゝ利ゝの春ゝ花ゝ紅ゝゝ
ゝみゝ

燈懸水際明

みゝるゝこゝ紅けゝうゝゝゝ水のゝゝまゝにみゝゝ去ゝ乃ゝ
ゝゝ

月入花離晴

やゝくゝ入月ゝゝあゝの紅山のゝ紅ゝゝにけのゝくゝゝゝ
いゝゝ

ゝゝ紅ゝ紅

ゝゝ紅ゝゝ白ゝゝゝけらめゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ